

水の恵みを分かち合う あさくら3ダム

ふれ愛だより

臨時増刊号



平成20年7月18日発行

Japan Water Agency (JWA)

独立行政法人 水資源機構
小石原川ダム建設所広報委員会

〒838-0019 福岡県朝倉市上秋月1373-1
TEL 0946-25-1100 FAX 0946-25-1188

<http://www.water.go.jp/>

臨時増刊号の記事

流域トピックス

筑後川流域のトピックス。～大山ダムと古賀河川図書館～

出張！事業のご紹介

小石原川ダムの事業紹介活動 in 三奈木

自然観察会

上秋月の秋月八幡宮に生息するヒメホタルのご紹介

特集 ～水源地域：朝倉市高木地区の取り組み～

小石原川ダム建設事業では、筑後川支川の佐田川と小石原川を導水路で接続し、既存の江川ダム、寺内ダムと共に、貯水池の有効利用を増進する計画となっています。（詳しくはWEBをご覧ください）

そのため水源地域である佐田川上流の高木地区について理解を深めるため、事業関係者を対象とした「環境学習会」（平成20年6月10日夕方6：00～9：00）を開催しました。学習会では同地区振興会長の熊谷氏より、同地区の取り組みや状況など、広範な内容についてご講演いただきました。今号では、この内容を取りまとめ、特集としてご紹介いたします。



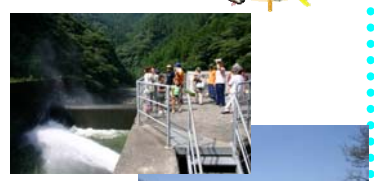
（あじさいとほたるの6月）

水の週間活動場所



お問い合わせ先
 両筑平野用水総合事務所
 TEL:0946-25-0113
 寺内ダム管理所
 TEL:0946-22-6713
 小石原川ダム建設所
 TEL:0946-25-1100

あさくら3ダムでは、「水の週間」イベントとして、「ダム見学会（8月3日）」と映像ブース設置（8月1日～3日の10:30-15:00）を行います。皆様のお越しをお待ちしています。



江川ダム



寺内ダム



* 流域トピックス *

大山ダムの基礎掘削がほぼ完了 - 本体コンクリート打設に向け準備が進む! -



同じ筑後川流域内、大分県日田市大山では、大山ダム建設事業が進められています。総貯水容量は約1,960m³で洪水調節、既得取水の安定化・河川環境の保全、新規利水を目的に、平成24年の完成を目指して施工が進められています。

現在、ダム本体(堤体)部分の基礎掘削(ダムのコンクリートを打設するための掘削)がほぼ終了し、本体コンクリートの打設の準備を行っています。最盛期を迎える大山ダムでは、8月にインフォメーションセンターをオープンする予定です。是非足をお運びください。

<http://www.water.go.jp/chikugo/oyama/index.htm>

古賀河川図書館 開館!

筑紫野市武蔵に古賀河川図書館が開館しました。この図書館は河川、ダム、湖沼に関する専門図書館で、館長の古賀邦雄氏が水資源開発公団(現水資源機構)に在職中、水に関する書籍を各地で収集されたものを一般に公開されたものです。

現在、蔵書数が8千冊に及ぶだけでなく、貴重な書籍も多く、研究者からも高く評価されています。



所蔵文献の概要は次のとおりです。

●水、河川などに関する歴史、文学 ●明治、大正時代の河川に関する本 ●河川工学 ●治水の本 ●河川便覧 ●河川地理 ●水辺空間 ●各地方の河川に関する本 ●ダムに関する本 ●農業水利に関する本 ●河川の法律 ●海外の河川に関する本 ●水経済に関する本 ●全国の河川に関する本 ●湖沼に関する本 ●橋に関する本 ●水利用のエネルギー開発 ●各地域の名水の本 ●日本の水道に関する本 ●工業用水に関する本 ●下水道に関する本 ●地下水に関する本

※古賀河川図書館の所在地※
福岡県筑紫野市武蔵2-2-12

電話 092-929-6407

開館時間: 10時~17時(原則)

※来館される場合は事前に電話連絡をお願いします

<http://mymy.jp/koga/>

※ふれ愛だよりでは、近々、古賀河川図書館の特集を予定しています。お楽しみに。

出張! 事業のご紹介



三奈木地区での事業紹介活動

小石原川ダム建設所では、事業計画や状況をご紹介する説明会を実施しています。去る6月23日(月)は三奈木地区“緑寿大学”(三奈木地区のご高齢者による学習の場として毎月1回程度開催されているとの事)から要請いただき、約70名の方々に事業のご紹介をさせていただきました。

水に対する強い思いと、地区を取り巻く水環境の変化など、多くのご意見を頂戴しました。





自然観察会の実施 ～秋月八幡宮(上秋月)～

平成20年6月16日、小石原川ダムの環境保全対策検討委員会の委員である飯田大和先生のご案内による「ヒメホタル」の観察会が事務所の前にある秋月八幡宮で実施されました。

急遽の企画ではありましたが、飯田先生がお勤めの朝倉市馬田保育園の保育士さんとそのご家族の方、小石原川ダムの職員併せて約20名が参加されたもので、ここにご報告をさせていただきます。



ヒメホタルを手元で観察する様子

6月の中旬ともなると朝倉地方のホタルの名所はホタルの乱舞を見ようと多くの方々がに訪れる多くの方々にぎわっています。ここ上秋月の「ヒメホタル」は数は多く無いものの、ここ秋月八幡宮や近くの森では密かに繁殖を続けています。日本で確認される約40種のホタルの中でも、ゲンジボタル、ヘイケボタル、ヒメホタルはよく光るホタルとして知られており、このうち、ヒメホタルの成虫は、ヘイケボタルの成虫よりもひとまわり小さいこと、ゲンジボタル、ヘイケボタルと違い、幼虫は陸上に生息していることが特徴で、青森県を北限として四国、九州まで広く分布しています。

このヒメホタルは、幼虫時に陸産貝類を餌とし、これらの貝が生息する腐葉土がある樹林や竹林がその生息環境とされています。したがって、これらの条件を満たす自然が八幡宮の森には残されていると言えます。

また、秋月八幡宮の歴史は古く、平安時代中期に建立したのがはじまりで、鎌倉時代に、秋月氏の祖といわれる秋月種雄公(大蔵種実の八世孫)が秋月の地に移り住むようになり、現在の社の本宮を造営したとされています。社は秋月氏によって400年にわたって代々修造が加えられて多くの信仰を集めてきましたが、秋月氏の高鍋への移任によって久しく退廃していったとあります。江戸時代に入り、1624年、秋月藩初代藩主黒田長興公が就任されてからは、15年ごとに数次にわたって社の本宮、拝殿の改修が行われて施設が完備されると共に、夏秋二度の祭事が賑やかに行われるなど、近隣の住民の信仰がたいへん厚かったと記されています。現在も七月(夏祭り)、十月(御神幸の御降り)などが行われています。

歴史ある郷土秋月でも由緒ある建造物として800年にわたって現在まで受け継がれている八幡宮は数少ない歴史的建造物となっています。(参道入口案内板より)

小石原川ダム建設事務所にお立ち寄りになった際は、是非一度秋月八幡宮とヒメホタルをご覧下さい。なお、ヒメホタルが光り始めるのが暗闇となった午後8時頃からです。



大木がたくさんある秋月八幡宮



特集 きれいにしよう我がふる里の川



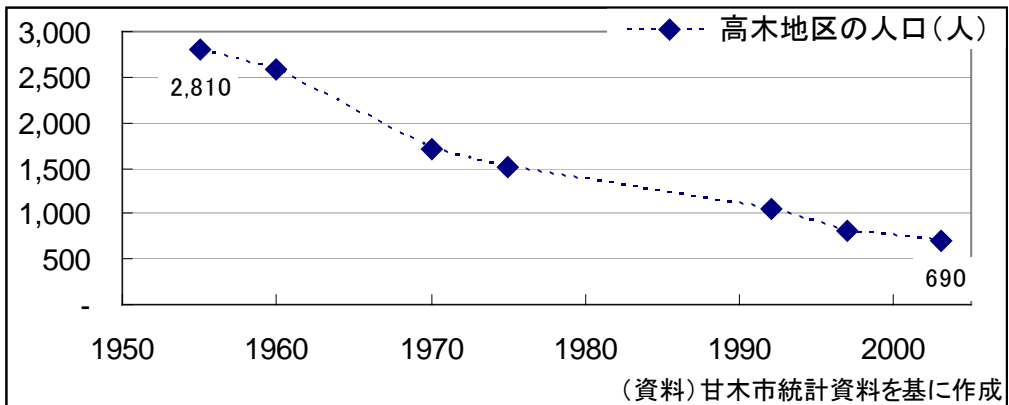
1. 朝倉市高木地区について

福岡県朝倉市高木地区は、同市の北東部、筑後川の右支川佐田川の源流に位置するところです。この高木地区は、1889年（明治22年）4月に町村制度が施行されてから福岡県旧上座郡黒川村と佐田村が合併し高木村となり、その後1955年（昭和30年）3月、甘木市（現朝倉市）に編入合併されました。高木地区の下流には福岡、筑後地域の水源である「寺内ダム」（昭和53年竣工：ロックフィルダム）が位置する、ダムの水源の山里です。

土地の形状・利用形態は、寺内ダム貯水池上流の黒川が佐田川に合流する箇所以外は比較的緩やかな谷地形となっており、開けた土地は住居と水田に利用され、山の斜面は果樹の畑として利用されている他は森林となっています。この森林は戦後復興の折、従来あった広葉樹を切り、針葉樹が植林されたものです。

高木地区の集落は、佐田川沿いの佐田地区、支川黒川沿いの黒川地区からなり、かつては郵便局、小中学校、駐在所、農協など公共施設もありましたが今日では小中学校は他地区と統合されています。

高木地区の主な産業は林業と農業、



特に「高木梨」としてブランドを誇る梨栽培が主な産業です。高木梨は大正のころより栽培が始まり、福岡県内では最も古い産地の一つで、東京、大阪、鹿児島、高知そして福岡と長年出荷をしてきました。従前は、「20世紀梨」が主でありましたが、袋掛けを二度要するなど栽培に手間がかかることや、品種改良で甘みが「20世紀」に劣らないことなどから、「幸水」系の梨栽培に変わりつつあります。これらの収穫時期は「幸水」が7月末よりはじまり「愛宕」が正月前まで収穫が行われます。

特に最近、新潟県の「天の川」と高知県の「今村秋」を掛け合わせて出来た甘く、歯ごたえのある新高（にいたか）が人気があります。

2. 高木の村おこし運動の始まり

「どうかせんとひげんばい [どうかしないといけない]」（高木語ろう会結成）

高木地区の人口は、平成5年では約900人でした。平成20年現在では約570人となっています。これは昭和30年代より、若者の流出が始まったことと、少子化によるもので、日本の山間部の姿をそのまま象徴しているものと言えます。



講師略歴

熊谷 繁氏
(くまがえ・しげる)

1940年福岡県朝倉市生まれ、農業に従事し、朝倉市高木地区の村おこし協議会長、高木地区振興会副会長を歴任後、高木振興会の会長を努める。現在、朝倉市振興会連合会の会長も務める。1999年よりJA筑前あさくら理事、2005～2007年まで同監事。過去二回、アメリカ西海岸での農業研修の留学も経験。

このような山間部の人口流出に危機感を抱き、1983年（昭和58年）に「高木むらおこし対策協議会」を設立し、過疎化が進む地域を元気にしようとの思いから運動を開始しました。1984年（昭和59年）、当時の若手60名により「高木語ろう会」を結成し、1986年（昭和61年）に住民交流・参加による運動会を企画し実行しましたが、高木地区だけに止まるとはいけないという思いから、1987年（昭和62年）、地区外からも参加が可能なイベントを企画したのが「高木むら里まつり」の始まりです。

3. 高木むら里まつりの中止について

12回で幕を引く（運営資金不足とスタッフ難）

「高木むら里まつり」は、秋の梨の出荷時に合わせて、毎年9月15日に高木中学校（朝倉市黒川：現在廃校）で開催し、もぎたての梨の販売はもちろんのこと、梨を使った企画が盛りだくさんで、当初来場者は百人も来れば良いだろうと考えていたところ、グリーンツーリズムの先駆けとなったのか、思いもよらず来場者は約3千人と大盛況となりました。従来からの道路整備の遅れも相まって、地区内は大渋滞、甘木警察署からは厳重注意を受ける始末でした。来場者の増加に応じて交通整理員や仮設トイレを配置するなど、来場者への配慮もしていきました。この後、1992年（平成3年）には、同じ農林水産大臣賞の受賞が縁となり、玄界灘に面した港町である佐賀県呼子町（現佐賀県唐津市）との交流も始まりました。これは、山と海の交流と称して、お互いの村祭りに出向いていき、お互いの特産品である「高木梨」と「呼子のイカ」を販売し、広めるものでした。これらの相乗効果も相まって、高木梨の人気と田舎料理、田舎を満喫できる催しとして、福岡都市圏から1万人が訪れる人気の催しとして成長しました。しかし、これだけ人気を博した反面、まつりの運営、会場設営、食事の手配、交通整理などを行政の手を借りず、全て地区の住民だけで行ってきたため、住民の高齢化と過疎化、不況による協賛金の減少には敵わず、1999年（平成11年）これまで12回続いた「むら里まつり」に終止符を打ちました。

4. 高木の自然に目を向けて

「きれいにしよう我がふる里の川」をテーマに決定。

平成10年頃から、にわか「環境保護」等環境問題に関心が高まるようになりました。もともと、高木地区はホタルがごく当たり前のように生息していましたが、当時、農業や家庭排水によりホタルが少なくなりつつありました。また、「高木むら里まつり」は秋の催しであり、その他の時期にも多くの人に来てもらう方法はないのか思案していました。そこで「高木むらおこし対策協議会」では、ホタルの再生・保全に目を向け「きれいにしよう我がふる里の川」をテーマに水質保全の啓発活動に取り組むことにしました。このことにより、寺内ダムの水質の保全にもつながり、福岡都市圏住民の共感を得られるのではないかと、都市部との交流が再開できるのではないかとのかすかな望みを抱いていました。

5. ホタルの保護活動と環境保全学習

(イ) 博多夢松原の会との交流と学習

福岡市にある「博多夢松原の会」は福岡市に本部を置き、1988年（昭和62年）に福岡市の百道浜

高木地区の出来事

暦年	年号	出来事
1983	(S58)	・村おこし協議会設立
1984	(S59)	・高木語ろう会設立
1985	(S60)	
1986	(S61)	・運動会開催
1987	(S62)	・第1回むら里まつり開催
1988	(S63)	
1989	(S64,H1)	
1990	(H2)	
1991	(H3)	・むら里まつり農林水産大臣賞受賞
1992	(H4)	・呼子町との海と山の交流が始まる
1993	(H5)	・ホテルまつり開催 ・婦人会解散
1994	(H6)	・黒川小学校閉校
1995	(H7)	・RKBホテルツアー開催
1996	(H8)	
1997	(H9)	
1998	(H10)	
1999	(H11)	・むら里まつり中止(海と山の交流も中止)
2000	(H12)	・佐田小学校閉校
2001	(H13)	
2002	(H14)	
2003	(H15)	・「あじさいロード」環境美化運動として国土交通大臣賞を受賞
2004	(H16)	
2005	(H17)	
2006	(H18)	・甘木市、朝倉町、杷木町合併で朝倉市となる。
2007	(H19)	・小石原川ダム工事用道路と県道の合併事業着手



高木地区を流れる佐田川

(現シーサイドももち)の青松の復元のため、植樹を行っているNPO法人です。この植樹活動にはこれまで2万人の人々が加わっています。「博多夢松原の会」との交流は、1994年(平成6年)頃から、都市部と地方部の違いはあれど、自然環境保全という考えに相違ないことから、お互いの交流が始まりました。この「博多夢松原の会」の活動に参加することで、自然保護活動のノウハウを教わりました。

(ロ) ホタル保全への取り組み(減らさない努力)

さて、実際にホタルの保全となると何をしたら良いのか、このことを見いだすために各地のホタルの保護の現場を視察しました。ホタルを増やすため、ホタルの餌であるカワニナを川に放流するなどの取り組みもありましたが、ホタルを永年の輝きとするため、水質の保全を取り組みの柱とし、その目標をホタルを増やすことではなく、減らさない努力をしていくこととしました。

(ハ) 地域住民へのPR活動(農薬取り扱いと家庭洗剤)

科学の発達はめまぐるしいもので、これらの進歩に伴い、農薬、特に殺虫剤は少量で効果が上がるものが出始め、高木地区の農家でも使われ始めました。特にPCPは有機塩素系の農薬で、昭和46年に一部使用が禁止されてものの、水田用の除草剤として使用されていましたが、魚毒性が強く、ドジョウなど、多くの魚類が死滅するのを目のあたりにし、その記憶が鮮明であったことから、田に除草剤を撒いて一定の残効期間(約3~5日程度)を経てから川に流すように考えました。残念なことに、その時からの影響か「カジカ」や「川エビ」の個体数は激減したままの状況です。



(ニ) ホタル祭りの開催(RKBラジオとの交流、甘鉄ホタルツアーの受入れ、地域での客受入れ(ホタルの宿)、花いっぱい運動(あじさいロード))

高木地区には婦人会がありました。過疎化と高齢化により、1993年(平成5年)解散に至りました。現在、朝倉市内でも市街地の婦人会が残るのみで、これもまた地方部を象徴する出来事でもあるように思われます。この頃から記録媒体の進歩などによりカラオケブームが再来し、カラオケ装置も安価で手に入るようになったこともあり、各地でカラオケ同好会ができました。こうなると仲間内だけではなく、披露する場を設けたい、大きな大会で歌いたいなどの思いも少なからずでてくるものであります。また、女性は老若を問わずお喋りです。婦人会は婦人同士のコミュニティーの場でもあり、その場が失われると地方の活性化にも少なからず影響が生じるものです。しかしながら、婦人会は既に解散していたため、「村おこし協議会」がその受け皿となり、「ホタル祭り」でカラオケ大会を開催するきっかけになりました。



1993年(平成5年)第1回のホタル祭りを開催しました。例年、6月の中旬に開催しているイベントです。この日の前後は、高木のホタルを鑑賞してもらうため、寺内ダムの上流県道脇に案内所を設置し、ホタルのポイントを案内しています。時期によってホタルの出現場所も異なるため、せっかく遠くから来てもらっているのだから、より良い場所を案内しているわけです。

また、1995年(平成7年)には「博多夢松原の会」でラジオ局のスタッフと知り合ったことがきっかけで、RKBラジオが主催するホタルツアーが催され、ラジオ番組でその内容が紹介されるなど、高木地区のホタルが福岡県内に知れ渡るようになりました。

こうして多くの人々が訪れていただくと、少しでも町並みや沿道をきれいにしようと思うのが人情であります。幸い、私が平成5年に「村おこし協議会」の会長になったとき、ふるさと創生事業の力を借り、甘木市からホタルの整備に関する補助をいただきました。この補助を使って、高木地区の入り口の西原にはあじさいロードと称し、ホタルの時期に咲くあじさいを植えました。その後も欠かさず、ホタルの時期の前には剪定や草刈りなどを行っています。

このように都市圏をはじめとした多くの人々がホタルの時期に訪れ、自然に触れていただき自然の豊かさを実感したとき、「ホタルまつり」は格好のPRの場所でありました。催しに来ていただい

た方々の前で「美しくしようわがふる里の川」を合い言葉に、農薬の制限と、田に農薬を撒いてから一定の残効期間（約3～5日程度）を経てから川に流すようにすること、家庭洗剤についても同様に使用量を減らすことと、無リン系洗剤への転換を毎年、必ずお願いしました。

6. 小学校の相次ぐ閉校

(イ) 跡地の活用

高木地区にある高木小学校、黒川小学校は過疎化の流れに歯止めがかからず、2000年（平成12年）に相次ぎ閉校しました。小学校の閉校は我々の心のふるさとを失う大変辛い出来事ではありましたが、せめてこれらの建物を残していくことが、ここ高木をふる里とする人々の願いであったことから、施設を残すことを市に要望しました。



(ロ) 都市との交流施設（清流館、共生の里）

幸い、二つの小学校は「清流館」、「共生の里」として残ることになりました。「清流館」は自然体験学習施設として宿泊、食堂、研修施設として利用され、「共生の里」は世界子供美術館として利用されています。これらの施設が都市部の人たちとの交流の場となればという願いで運営しています。

(ハ) 高木の良さの見直しと実践を（史跡、鳥屋山等）

鳥屋山（都野山）は、標高645mで佐田川の源流をなす山です。鳥屋山の歴史は意外に古く、約900年前奥州衣川の戦いで敗れた安倍貞任の弟宗任がこの地に逃れ、鳥屋山中腹に先祖の霊を祀ったと言われ、都高院として現在も残っています。また、鳥屋山頂には雄岩・雌岩、奥の院などや、登山道の途中には鎖場もありちょっとした登山を楽しめ、最近の壮年の登山ブームと都市圏から近いこともあり、人気の登山コースにもなっています。この他、黒川地区の奥に控える高木神社があります。かつては大行事社と呼ばれ、平安時代に建造されたと言われていましたが、戦国時代に兵火に遭い、永禄6年に乙石美濃守信昌が修造したと言われています。10月29日を中心に関前後数日間行われるオクンチは、筑前朝倉の宮座行事として、福岡県の無形民俗文化財にも指定されています。高木地区はホテルをはじめとした自然環境も豊かですが、このような歴史のある地でもあり、これらの歴史を掘り起こし、歴史回廊として史跡・神社と豊かな自然に触れていただければ、更に深くこの地を知っていただくことができれば幸いです。

7. 今後の高木地区の課題

(イ) 高齢化と過疎の道

この高木地区において、高齢化と過疎は避けて通れません。数年後は更に高齢化も進行するでしょう。しかしながらいくら自然が豊かだと言っても、この高木地区の人口が今後、更に増えるものとは考えられません。このことを直視し、今いる体制の中でベストな方法を模索し続けなければなりません。

(ロ) それでも生活していく気概（住民の助け合い運動）

私たちは、今後、過疎化が進む中で、都市部とうまく共存・共栄ができれば、地区の発展・維持のためにも都市部からの交流人口を増やすことが必要なことだと考えています。都市と地方、上流と下流、それぞれにいろいろなものでつながっています。「きれいな水」、「安全な食」を供することで都市の生活を支えられたら、地道なことですが、謙虚な思いで取り組まなければ、我々の将来、ひいては日本の地方部の将来も豊かなものとはなりません。

また、都市との交流を増やすためにも、現在の高木の道路整備状況では来場者の大幅な増も見込めません。県道整備は、従前から高木地区の願いでありましたが、なかなか実現されませんでした。この点については、小石原川ダム建設事業の迂回路・工事用道路と県事業による合同の整備を行っていくことで昨年より着手したところです。この事業の一刻も早い完成を期待し、出来る限りの協力をしていきたいと考えです。

(ハ) 後継人材の育成と継承努力

今後、各地からの交流人口を増やすためには、地元としてもそれを受け入れられる体制を整えなければなりません。その意味で、「村里まつり」や「ホタルまつり」は福岡都市部の方々と接し、交流の仕方、接し方を学ぶ大変良い機会でした。この体験を生かし、多くの人々と接するノウハウが培われたのだと思います。

「清流館」の運営は、地元の者のみで賄っているわけですが、運営を続けていくことこそ、まつりで得たノウハウを絶やさず、継承していくものと確信しています。



(ニ) ふる里の土となる覚悟

ホタルや水、農産物は豊かな自然の恵みから生まれたものです。自然と共生し、豊かな自然と水源を守り続けていくことこそ、我々上流に住む住民の責務だと考えています。過疎化と高齢化と向き合いながら、まだ高木地区には微かな元気があることを忘れないで下さい。最後に幾多の取り組みに協力をいただいた多くの皆様に感謝を申し上げます。(了)



参考：鳥屋山（都野山）について（甘木観光協会）、黒川院歴史散策マップ（黒川郷土史研究会）、水質調査の基礎知識（近畿技術事務所）、西日本新聞「過疎に立ち向かい12年」

※ 講演に関連し、ほたるの基礎知識や高木地区の年間行事等について記したレポートを、「小石原川ダム建設所のホームページ」に掲載しています。

小石原川ダム建設所より： 本文は、独立行政法人水資源機構小石原川ダム建設所が主催する環境学習会における熊谷繁氏の講演内容を元に、小石原川ダム建設所環境課が写真やデータを整理し取りまとめたものです。水源地域である高木地区の「きれいにしよう我がふる里の川」の取り組みは、激動する社会変化の中、水源地域が水の恩恵を受ける地域、人に向ける強いメッセージあり、また水源地域である高木地区にとっては地域の未来を住民達で考える上でのキーワードとなっています。水源地域である高木地区の無数のホタルの光には、過疎化と高齢化に立ち向かいながら、保全に取り組む地域の人々の支えがあったからこそということを私達は知らなければなりません。私達はダム事業者として、「水の恵みを分かち合う」ための活動をご紹介するお手伝いが出来ればと考え、特集にてご紹介させていただきました。

最後に、高木地区の本文をまとめるにあたって、熊谷繁氏には多大なご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。



水 五 則

- 一 みずから活動して他を動かすは水なり
- 二 常に己の進路を求めてやまざるは水なり
- 三 障害にあつては激しくその勢力を百倍し得るは水なり
- 四 みずから潔らしくして他の汚濁を洗い清濁あわせいる量あるは水なり
- 五 洋々として大海を満ち発しては霧となり雨雲と変じ霰と化す凍っては玲瓏たる鏡となり、しかもその性を失わざるは水なり

<編集後記>

平素より、水資源機構の事業にご理解を賜り厚く御礼申し上げます。今年ホタルシーズン中にいろいろとホタルのことを知ることが出来ました。種類もさまざま、生態もさまざま、光り方もさまざま。光る時間帯についても、一晩中光っていると思っていた人もいたり！？地元の方々に支えられていることを忘れずホタルを鑑賞しなければ...ホタルシーズンには、川沿いの道路で渋滞や駐車列ができます。お出かけの際は、ご安全に！